

母子相互作用の発達心理学的研究

研究協力者 小 嶋 謙四郎（早稲田大学）
大 藪 泰（長野大学）
田 口 良 雄（上田市立産院）
百 名 盛 之（京都大学）
繁 多 進（横浜国立大学）
依 田 明（横浜国立大学）

はじめに

乳児期の母子相互作用が、小児のパーソナリティの発達と健康の保持に果たす役割をあきらかにし、その研究成果を発達障害の予防、早期発見、早期指導の理念や施策に反映させ、乳幼児保健指導の指針作成に活用させることを主たる研究目的として、この班は編成された。

研究テーマを1) プレアタッチメント期の母子

相互作用（大藪、田口担当）2) アタッチメント形成期の母子相互作用（百名）3) アタッチメント確立期の母子相互作用（繁多）4) 母子の分離・自立（依田）5) 乳幼児保健指導と母子相互作用仮説（小嶋）の5領域にわけ、分担研究をおこなうことにした。

本年度は初年度であるので、計画段階あるいは、予備調査の報告である。

プレアタッチメント期の母子相互作用

大 藪 泰 ・ 田 口 良 雄

研究目的

乳児が生得的に有する行動状態は、母親に対するシグナルとしての機能を持ち、乳児期初期の母子相互作用に関与する要因のひとつと考えられる。特に啼泣は母親を自分のほうに引き寄せるシグナルとして、また覚醒は引き寄せた母親との接近を維持するシグナルとしての役割をはたしている。

乳児の行動状態間の継起は発達するにつれて変化すると考えられるが、本研究では啼泣と覚醒との連続性に注目し、「啼泣と覚醒は次第に連続性を増し、母子相互作用の形成により効果的な機能を発揮するようになる」との仮説をもうけ、早期産児と満期産新生児の啼泣と覚醒との移行関係を検討した。

研究方法

対象児

○ 早期産児

都立小児保健院未熟児室に入院していた男児2

名、女児8名。誕生時の在胎週数：31週3名、34週2名、35週4名、36週1名。平均出生体重：1850g。分娩：自然分娩。Ap.s.(1min)：1名が6、その他は8以上。誕生後の経過：良好。

○ 満期産新生児

上田市産院で誕生した男児3名、女児5名。平均在胎週数：39.9週。平均出生体重：3,093g。Ap.s.(1min)：8以上。妊娠および分娩：異常なし。健康新生児。

手続き

対象児を直接視覚的に観察し、その行動状態を10秒ごとに評定した。行動状態は①睡眠：閉眼で眼球運動がある場合もない場合もある。②まどろみ：視線が定まらずまどろんでいる状態で、眼瞼の不随意的な開閉がみられる。③覚醒：眼瞼がしっかり開かれている状態、④啼泣：泣き顔と泣き声がみられ、眼瞼は開かれている時も閉じられている時もある、の4種類である。

観察時間は早期産児では2時間、満期産児では3時間であった。早期産児の受胎後週数別の観察回数は、33・34週7回、35・36週14回、37・38週16回であった。満期産児では各対象児とも生後0日、2日、5日の3回観察した。ただし生後5日に観察できなかった対象児が1名あった。

結 果

①早期産児 啼泣の直前の行動状態をみると、受胎後33・34週では睡眠が92.3%、まどろみが7.7%、覚醒は0.0%であるが、35・36週では睡眠20.0%、まどろみ24.0%、覚醒56.0%となり、37・38週では睡眠16.1%、まどろみ51.6%、覚醒32.3%であった。

啼泣の直後の行動状態も直前の場合と同様の傾向をみせ、33・34週では睡眠が71.4%、まどろみ28.6%、覚醒0.0%であるが、35・36週になると睡眠21.8%、まどろみ30.4%、覚醒47.8%となり、37・38週では睡眠19.6%、まどろみ

41.0%、覚醒39.4%となった。

②満期産新生児 啼泣の直前の行動状態は、生後0日では睡眠が55.6%、まどろみ18.0%、覚醒26.4%であるが、生後2日では睡眠45.3%、まどろみ18.8%、覚醒35.9%となり、生後5日には睡眠23.8%、まどろみ19.1%、覚醒57.1%となった。

啼泣の直後の行動状態も同様の傾向を示し、生後0日では睡眠53.7%、まどろみ26.9%、覚醒19.4%であるが、生後2日では睡眠33.3%、まどろみ33.3%、覚醒33.3%になり、生後5日には睡眠17.1%、まどろみ22.9%、覚醒60.0%となった。

以上のように、早期産児でも満期産新生児においても、啼泣の直前および直後の行動状態は発達につれ睡眠の占める比率が減少し、覚醒が増加する結果が示されており、「啼泣と覚醒は次第に連続性を増す」という本研究の仮説を支持する結果が得られたといえる。

「Strange Situationにおける一歳児の Attachment Behavior」

繁 多 進

目 的

MAinsworthらが標準化したアタッチメントの実験的研究方法は欧米において広く用いられ、アタッチメントのパターンをA、B、Cという3群に分類する方法もすでに世界的に定着してきている。しかし、我が国においては、この方法を用いた研究がいまだなされておらず、国際的な比較が不可能な現状であるので、同一の尺度を用いて日本における乳幼児のアタッチメントの特質をさぐるため、Strange Situationを用いたアタッチメントの実験的研究を試みた。

手 続

被験者は誕生日前後一週間以内の満一歳児とその母親24組。Strange Situationは横浜国大教育学部心理学教室のプレイルームを9フィート四方にしきって設けられた。観察はOne Side mirrorを通して行なわれた。2台のビデオカ

メラが用いられたが、その1台には実況放送録音を入れた。Strange Situationは母と子、母と子とStranger、子とStranger、子どもだけ、など8つのエピソードからなり、その過程でそれぞれ2回ずつの母子分離場面と母子再会場面が設定されている。

行動の分析はビデオテープを15秒インターバルでおこし、その15秒間で生じた行動をチェックするという方法で行なわれた。

結 果

(1)一般的行動分析 ①探索行動は母親在のエピソードで多く、母親不在のエピソードでは減少した。一歳児の多くが母親を“安全の基地”として使用していることを示すものと云える。②Vocalizationも母親と子どもだけのエピソードで圧倒的に多かったが、それらのほとんどは母親に向けられたものではなく、独語的なものであった。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



研究目的

乳児が生得的に有する行動状態は、母親に対するシグナルとしての機能をもち、乳児期初期の母子相互作用に關与する要因のひとつと考えられる。特に啼泣は母親を自分のほうに引き寄せるシグナルとして、また覚醒は引き寄せた母親との接近を維持するシグナルとしての役割をはたしている。

乳児の行動状態間の継起は発達するにつれて変化すると考えられるが、本研究では啼泣と覚醒との連続性に注目し、「啼泣と覚醒は次第に連続性を増し、母子相互作用の形成により効果的な機能を發揮するようになる」との仮説をもうけ、早期産児と満期産新生児の啼泣と覚醒との移行關係を検討した。